

第3章 保全に関する提案

3.1 注目すべき種

当該調査地が位置する高座山は、まとまった樹林環境を有する一方で、周辺地域が宅地化されたことにより、動植物の生息環境としては、連続性を失った孤立したものとなっている。そこで、当該地域の自然環境が有する生態系の現状を客観的に判断するために、優れた生態系を指標する「重要種」と、人間の活動の影響度合いを指標する「外来種」の出現状況についてまとめ、今後の保全管理に関する提案の材料とした。

3.1.1 重要種

(1) 重要種の選定条件

現地調査で確認された種を対象に、表3.1.1に示した法令や資料に定められた規準を基に、重要種の選定を行った。その結果、植物でヒメカンアオイ1種、鳥類でカワウ、アオサギ、ハイタカ、ヨタカ、アオゲラ、サンショウクイの6種、昆虫類でギフチョウ、ツマグロキチョウの2種、合計9科9種が重要種に該当した。各種の選定理由については表3.1.2に示したとおりである。

表3.1.1 重要種の選定条件

分類	法令および資料の名称	対象
1	「文化財保護法 第69条」（昭和24年）	天然記念物 特別天然記念物
2	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成5年）	国内希少野生動植物（*平成17年3月現在での指定種）
3	「改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物（1）哺乳類」（環境省 平成13年）	レッドデータブックにおけるカテゴリー区分 EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：地域個体群
	「改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物（2）鳥類」（環境省 平成13年）	
	「改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物（3）爬虫類両生類」（環境庁 平成11年）	
	「改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物（8）植物Ⅰ（維管束植物）」（環境庁 平成11年）	
	「環境庁報道発表資料 無脊椎動物（昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等）のレッドリストの見直しについて」（環境庁 平成11年）	
4	「愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 植物編」（愛知県 平成12年）	
	「愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 動物編」（愛知県 平成13年）	
5	「保全を要する自然環境要素分布調査報告書（自然環境保全基礎調査）」（愛知県農地林務部 平成元年）	調査対象種

表3.1.2 重要種の選定結果

分類	科 名	種 名	選定条件				
			1	2	3	4	5
植物	ウマノスズクサ	ヒメカンアオイ					○
鳥類	ウ	カワウ					○
	サギ	アオサギ					○
	タカ	ハイタカ			NT	NT	
	ヨタカ	ヨタカ				NT	
	キツツキ	アオゲラ					○
	サンショウクイ	サンショウクイ			VU	VU	
昆虫類	アゲハチョウ	ギフチョウ			VU	VU	○
	シロチョウ	ツマグロキチョウ			VU	VU	
—	9科	9種	0種	0種	4種	5種	5種

注1) 選定条件欄の番号および略号は表3.1.1に対応する。

今回の調査により確認された重要種は、国レベル(環境庁指定)で4種、県レベル(愛知県)で9種となる。このうち、「保全を要する自然環境要素分布調査報告書(自然環境保全基礎調査)」(愛知県農地林務部)で対象とされている種の内、カワウおよびアオサギについては、以下の理由により、重要種の対象外とした。

○カワウ

現在では、急速な分布拡大にともない、ねぐらや営巣地などでの樹木被害や採食地での食害が大きな社会問題となっており、各地でカワウの有害鳥獣駆除が実施されはじめている。また、今回の調査における確認状況は上空を通過した個体を確認されただけであり、本種の主な生息環境は水域であることから、当該地区は本種にとって主要な生息地ではないと考えられる。

○アオサギ

現在では、愛知県下の河川やため池、水路などでは普通に見られる種である。本種が営巣すると、糞に含まれるリンによって樹木が枯れてしまう。また、今回の調査における確認状況は上空を通過した個体を確認されただけであり、本種の主な生息環境は水域であることから、当該地区は本種にとって主要な生息地ではないと考えられる。

(2) 重要種の確認状況および生態等

重要種の確認位置図は図3.1.1に示した。以下に、各種の確認状況および生態についてまとめた。なお、現地調査で生態写真を撮影した種については、その写真と撮影日もしくは採集日を掲載した。

1) ヒメカンアオイ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

本州中部から四国の低山帯に分布するいわゆるソハヤキ要素の一種である。本州では三重、愛知、岐阜、長野、静岡、石川、富山、滋賀、和歌山の各県に、四国では高知県南東部に自生する。愛知県内における個体数や分布は割に多くて広い。すなわち平野部を除いた丘陵部や山地のほぼ全域に見られる。

葉は卵形で2～3月に開花する。花筒は短いコップ型で上部はくびれない。花筒内面の網目は細かく縦の条は15～21列ある。

(参考資料：「保全を要する自然環境要素分布調査報告書」)

② 確認状況

本種の生育が確認されたのは、調査地東部の谷沿いや谷開口部の緩傾斜面などで、広い範囲に分布している様子が確認されている。多い場所では1箇所あたり3～5株が生育しており、生息状況は良好であると言える。

③ 留意事項・その他

葉が小さく上品なので、古くから鉢植や庭に栽培される。栽培用の採取、森林の伐採が減少の原因となる。ギフチョウの幼虫の食草となる。



写真3.1.1 ヒメカンアオイ(撮影日：平成17年5月30日)

2) ハイタカ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

ユーラシア大陸に広く分布し、国内では主に本州中部以北で繁殖するが、四国でも通年生息しているという報告があり、繁殖している可能性が高い。冬期は全国で見られる。

全長オス32cm、メス39cmのハトほどの大きさの猛禽類で、体重はオスが約150g、メスが約300gで雌雄の差が大きいタカである。成鳥のオスは上面が暗い青灰色で、腹部や胸部には白地にオレンジ色の細い黄斑がある。メスは上面が灰色を帯びた暗褐色で、腹部や胸部には白地に暗褐色の黄斑がある。本州では標高700～2500mの山地の針葉樹に枝で浅い碗型の巣を作り、4～5卵を産む。主に小鳥類を捕食する。

(参考資料：「改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物（2）鳥類」)

② 確認状況

1月の任意観察調査で、調査地北部の樹林上空より住宅地の方向へ飛翔する1個体が確認された。今回の調査では特に採餌などの行動は確認されなかったものの、本種の餌となる小鳥類は調査地に多く生息していることから、調査地やその周辺地域を越冬場所および採餌場所として利用している可能性は高い。

③ 留意事項・その他

県内各地で記録があるが、数は少ない。越冬のためには、餌となる小鳥類が豊富である必要があり、都市化の進展に伴い生息地が狭くなっている可能性がある。平地や丘陵地の雑木林を保全し、様々な鳥類が越冬できる環境の整備に努める必要がある。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)



写真3.1.2 ハイタカ

3) ヨタカ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

インド、ネパール、東南アジア、ロシア極東部、中国東部、朝鮮半島、マレー半島に分布し、北方のものは冬期に南下する。日本では、九州以北に夏期に生息する。県内では4月下旬に渡来し、平野部から山間部の明るい林に夏期に生息し繁殖する。

全長29cm。頭頂および上面は灰褐色で、細かく黒い虫食い状の斑がある。翼は細長く灰白色で、黒色と橙褐色の複雑な斑がある。夜間に、甲虫、トビケラ、ガなどの昆虫類を大きな口を開けて空中を飛びながら捕獲する。夕暮れ時から夜半にかけて、キョキョキョとかん高い声で鳴く。昼間は、林の中の横枝に平行に止まり休息する。特に巣材などは用いず、林縁の地上などに直接1～2卵を産卵する。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)

② 確認状況

5月の任意観察調査で、調査地西部のネズやアカマツが生育する尾根付近において鳴き声が確認された。調査地の尾根沿いのアカマツ林は本種の繁殖場所として相応しい環境であり、当該調査地において繁殖している可能性は高いものと考えられる。

③ 留意事項・その他

かつては、平野部から丘陵地および山間部の雑木林に普通に生息し1972年には名古屋市緑区でも繁殖が確認されているが、近年は、山間部を除き観察記録が少なくなった。本種が好むアカマツ林が少なくなったことが影響しているとも考えられるが、減少の要因は不明である。平野部の丘陵地にかけての雑木林を保全する必要がある。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)



写真3.1.3 ヨタカ

4) アオゲラ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

本州以南の日本固有種。標高1100mぐらいまでの山地の深い森に留鳥として生息し、冬には低地へ移るものもあるが、都会へも良く現れるコゲラに比べると、より自然度の高い環境を好んでいる。県下の山地に広く分布し、繁殖もしている。

オスの顔と首は灰色、下腹部は薄い灰色で黒色横斑がある。上面は黄緑色である。頭上から後頭部、顎の線が赤い。ヤマゲラとは腹部に黒色横斑がないことで区別する。メスでは後頭部と顎の線が赤い。顔がより灰色味がかかる。樹皮の中にひそむカミキリムシなどの幼虫を食べるほか、地上へおりて、アリもよく食べる。幹に自ら袋型の穴を掘って繁殖する。

(参考資料：「保全を要する自然環境要素分布調査報告書」)

② 確認状況

10月の任意観察調査で、調査地東部のコナラ林において鳴き声が確認された。調査地東部のコナラ林は樹径の比較的大きいコナラなどの広葉樹が生育しているが、繁殖期には確認されていないことから、繁殖の可能性については不明である。

③ 留意事項・その他

樹林に生息する種であることから、ゴルフ場建設、宅地開発等に伴う自然林の伐採等が、本種の減少の原因となりうる。



写真3.1.4 アオゲラ

5) サンショウクイ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

ウスリー、朝鮮半島で繁殖し、冬期はフィリピン、中国南部からマレー半島、スマトラ、ボルネオなどに移動する。日本には夏期に生息し、本州と四国などで繁殖する。愛知県内には夏期に山間部や丘陵部に生息し、春と秋の渡り時期には市街地で記録されることがある。

全長20cm。頭上から後頸にかけては黒色、背は灰色で下面は白色。顔は、黒い眼線があり眉斑と額は白色。尾は長くて黒色。広葉樹林や混交林に生息し、樹上で葉についた昆虫などを捕食する。高木の横枝に、枯茎、細い枝、樹皮を用いてさら形の巣を作り、外部にウメノキゴケをクモの糸で張り付けることが多い。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)

② 確認状況

7月のルートセンサス調査でコナラ林内を鳴きながら飛翔する2個体、定点調査で調査地東部の谷開口部の上空を東方向へ飛翔する1個体を確認した。出現時期および確認環境から考えると、当該調査地を繁殖場所として利用している可能性は高いと考えられる。

③ 留意事項・その他

夏期に山間部や丘陵地の林に生息し繁殖するが、1980年代以降数が著しく減少し、絶滅の可能性が増大している。山間部や丘陵地の広葉樹林を保全する必要がある。



写真3.1.5 サンショウクイ

6) ギフチョウ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

本州特産種で、その分布の日本海沿岸地方の北限は秋田県鳥海山の北麓、太平洋沿岸地方の東限は東京都の西部、西限は山口県である。県内の分布域は大きく分けると、名古屋市東部から矢作川の支流巴川流域にかけてと、岡崎市から東三河にわたる地域になる。

前翅長が約35mmの小型のアゲハチョウ。淡い黄色の地に黒の縦縞をもち、トラの斑紋に似る。成虫はカタクリ、スミレ、ショウジョウバカマなどの花の蜜を食餌とする。成虫は4月中旬から上旬にかけて、カンアオイ類に産卵し、幼虫はその軟らかい新しい葉を食べて成長し、晩春には蛹となり、翌春まで、夏と冬を過ごす。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)

② 確認状況

5月および6月調査時に、調査地東部のコナラ林の林床で、食草となるヒメカンアオイの葉裏に付着する幼虫を多数確認した。成虫の出現時期に調査を実施していない為、成虫の生息は確認されていない。なお、本種の幼虫が確認された谷沿いにはショウジョウバカマの生育が多数確認されており、成虫の食餌についても十分であると考えられ、調査地は本種の良好な生息環境であると考えられる。

③ 留意事項・その他

環境の保全が第一と考えられる。かつて薪炭業が行われていた時代には、森林の保護や適当な間伐が行われており、林床への陽射し、夏期の適度の温度、湿度、照度などが保全され、カンアオイ類やカタクリ、スミレなどの吸蜜植物の生育に良好な条件が備わっていた。減少の理由は、ゴルフ場の開設等による産地の消滅、化学的薬物の散布による環境の汚染などが挙げられる。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)



写真3.1.6 ギフチョウの幼虫(撮影日：平成17年5月30日)

7) ツマグロキチョウ *Heterotropa takaoi*

① 分布および生態

国内では、北海道以外に広く分布する。県内では、かつては秋遅くに秋型の個体が多く、地域でみられ、発見地点で注意すれば幼虫食草であるカワラケツメイの群落も認めることができたが、現在は極めて少なくなり、カワラケツメイもみられなくなっている。春の越冬個体、夏型の成虫はもともと多く見られなかったため現在はより発見困難である。

黄色の地色に黒縁や小さい斑紋、帯び等を持つ。自然の中ではキチョウとの区別は難しい。夏型はキチョウより一般的に小さいが、黒縁のキチョウとの違いを良く覚えなければ区別できない。幼虫はカワラケツメイを食草とする。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)

② 確認状況

10月の任意採集調査時に、調査地西部の尾根沿いを飛翔する1個体と、調査地北部の草地で10個体以上を確認した。成虫の生息は確認されたものの幼虫食草であるカワラケツメイの生育は当該調査においては確認されていない。カワラケツメイは日当たりのよい原野、河原、道端、荒地に群生する1年生草本で、調査地周辺に本種の生育する環境があり、そこで発生した成虫が当該調査地に飛来したものと考えられる。

③ 留意事項・その他

近年一般的な開発と里山農林業の衰退による草刈草原の減少など、カワラケツメイが生育出来ない状況になっている事などが本種の減少の原因の一部か全部と考えられる。残された生息地において、前述の人為的な原因を可能な範囲において除去すると共に、ツマグロキチョウを指標とした生態系の保全地域を設定することが望ましい。

(参考資料：「レッドデータブックあいち 動物編」)



写真3.1.7 ツマグロキチョウ(平成17年10月6日採集)

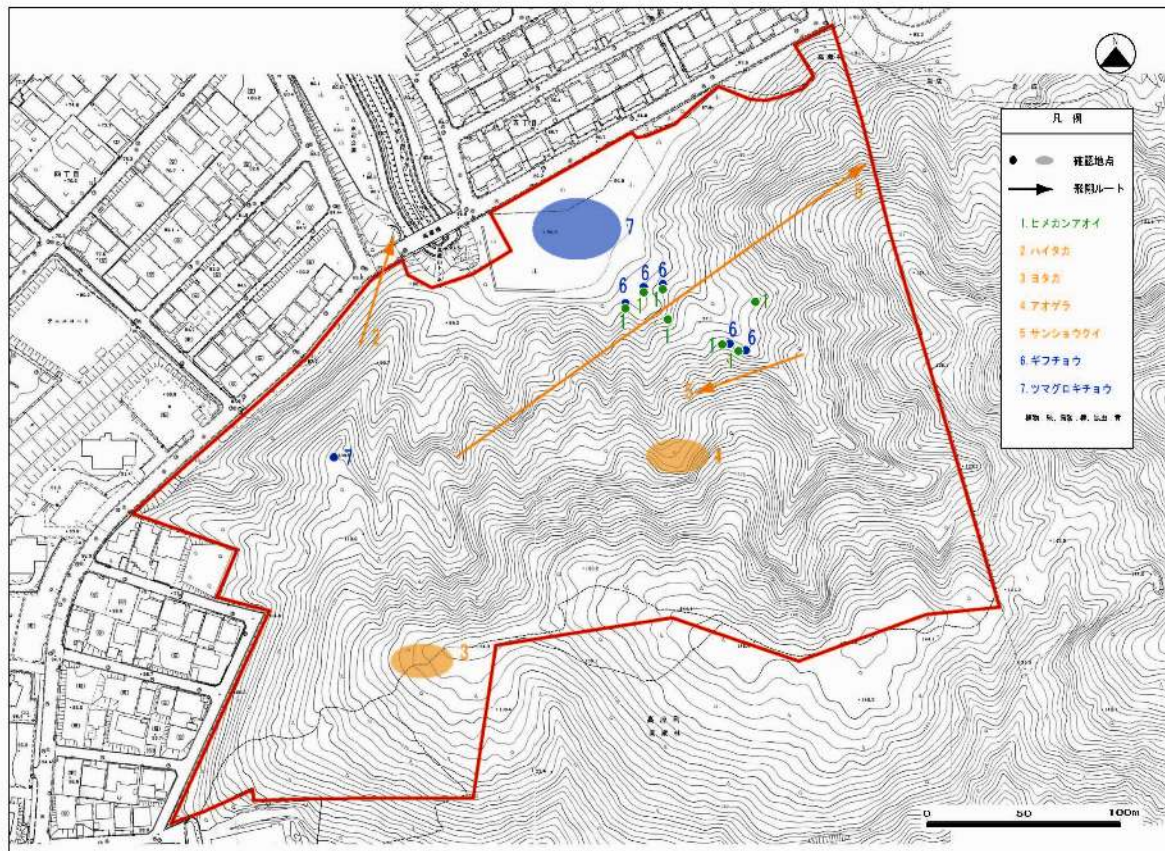


図3.1.1 重要種の確認位置図

3.1.2 外来種

(1) 外来種の選定条件

現地調査で確認された種を対象に、「外来種ハンドブック 日本生態学会 2002年」の外来種リストを参考に、外来種の選定を行った。その結果、植物で20種、哺乳類でアライグマ1種、鳥類でコジュケイ1種、昆虫類でアオマツムシ、アワダチソウ、ウグンバイ、モンシロチョウの3種、合計13科25種の外来種が確認された(表3.1.3)。

表 3.1.3 調査範囲で確認された外来種

分類	科 名	種 名
植物	ナデシコ	オランダミミナグサ
		コハコベ
	マメ	アレチヌスビトハギ
		ハリエンジュ
	アマ	キバナノマツバニンジン
	オオバコ	タチオオバコ
	キク	キダチコンギク
		ウラジロチチコグサ
		ブタナ
		セイタカアワダチソウ
		ヒメジョオン
	ユリ	タカサゴユリ
	アヤメ	ニワゼキショウ
	イネ	メリケンカルカヤ
		ヒメコバンソウ
		イヌムギ
		ネズミムギ
		オオクサキビ
		シマスズメノヒエ
		モウソウチク
哺乳類	アライグマ	アライグマ
鳥類	キジ	コジュケイ
昆虫類	マツムシ	アオマツムシ
	グンバイムシ	アワダチソウグンバイ
	シロチョウ	モンシロチョウ
—	13科	25種

これらのうち、特に従来の生態系に悪影響を及ぼす可能性が高い種や、その存在目立つ種などについて、現地調査での確認状況を踏まえた上で、注目すべき外来種として抽出した。その結果、植物ではセイタカアワダチソウ、キダチコンギク、タカサゴユリの3種、哺乳類ではアライグマ、昆虫類ではアオマツムシ、アワダチソウ、ウグンバイの2種を注目すべき外来種として選定した。

(2) 注目すべき外来種の確認状況および生態等

注目すべき外来種について、以下に各種の確認状況および生態についてまとめた。
なお、現地調査で生態写真を撮影した種については、その写真と撮影日を掲載した。

1) セイタカアワダチソウ

① 分布および生態

北アメリカ原産の多年生草本。地中を横走する粗大な根茎から直立する茎を出し、高さ2.5mに達する。茎と葉に短毛が密生し、ざらつく。葉は皮針形で、縁には低く不揃いの鋸歯があり、やや密に互生する。秋に茎の上部に多数の枝を出し、直径5mmほどの黄色い頭状花を密に穂状に着ける。瘦果は長さ1mm、汚白色の冠毛がある。明治年間に観賞用に導入されたとされるが、第二次世界大戦後に温暖地を中心に広く帰化した。空き地や河川敷に大群落をつくる。

(参考資料：「日本帰化植物写真図鑑」2001年、全国農村教育協会)

② 確認状況

調査地北部のススキ群落、ヨシ群落に混生していた。現状では群落を形成するほど繁茂していないが、パッチ状に群生しているところがみられた。

③ 留意事項・その他

セイタカアワダチソウは、一度定着すると地下茎によって急激に広がり、2～3mという高茎によって在来種などの先住者を駆逐し、完全な優占群落を形成するため、今後、繁茂することがないように留意する必要がある。

年3回以上の刈り取りによりセイタカアワダチソウの繁茂を抑えることができる。

(参考資料：「外来種ハンドブック」2002年、日本生態学会)



写真 3.1.8 セイタカアワダチソウ(撮影日：平成 17 年 10 月 6 日)

2) キダチコンギク

① 分布および生態

北アメリカ原産の多年生草本。太く短い根茎がある。茎は多くの分枝を出して株立ちとなり、高さ40～120cm。枝は茎に対して直角に出、先端は下垂する。葉は互生、皮針形から倒皮針形、しばしば鎌形に曲がる頭状花は多数で白色。舌状花は20個内外、筒状花は黄色。花期は秋。日本には、朝鮮戦争の時、北九州に渡来したとされ、四国、東海地方に広がっている。

(参考資料：「日本帰化植物写真図鑑」2001年、全国農村教育協会)

② 確認状況

セイトカアワダチソウと同様、調査地北部のススキ群落、ヨシ群落に混生していた。セイトカアワダチソウと比較すると生育量は少なかった。

③ 留意事項・その他

現状では、セイトカアワダチソウほど他の植物を駆逐し、生態系に大きな影響を与える種として注目されていないが、セイトカアワダチソウと同様、株立ちするという性質があることから、今後、繁茂することがないように留意する必要がある。



写真 3.1.9 キダチコンギク

(引用：「日本帰化植物写真図鑑」2001年、全国農村教育協会)

3) タカサゴユリ

① 分布および生態

台湾の原産で、19世紀の末にイギリスに花卉として導入されて以来、観賞用に各国で栽培されている多年生草本。地下の黄色味を帯びた百合根状の鱗茎から1.5mほどに達する直立茎を出し、幅約1cm、長さ15cmほどの線形の葉をやや密につける。夏から秋にかけて茎の頂部に長さ15cm、直径13cmほどのラッパ状の6弁の花を総状につける。花の内部は乳白色、外側は紫褐色を帯びる。我が国には1924年に導入され、園庭や切り花用に栽培されてきたが、種子の発芽から6ヶ月ほどで開花するため、近年各地で野生化して道端や堤防法面などで繁殖している。

(参考資料：「日本帰化植物写真図鑑」2001年、全国農村教育協会)

② 確認状況

セイタカアワダチソウ、キダチコンギクと同様、調査地北部のススキ群落、ヨシ群落に混生していた。セイタカアワダチソウ、キダチコンギクと比較すると生育量は少なく、ススキ群落、ヨシ群落に点々と散生している程度であったが、秋期調査時にはラッパ状の白い大きな花をつけていたため、目立っていた。

③ 留意事項・その他

キダチコンギクと同様、現状ではセイタカアワダチソウほど他の植物を駆逐し、生態系に大きな影響を与える種として注目されてない。しかし、自家受粉すること、短期間で成長し開花できること、貧栄養の土壌でも生育することなどの性質により、最近急速に広がっているとされており、今後の動向に留意すべき種である。

(参考資料：「日本の帰化植物」2003年、清水建美編)



写真3.1.10 タカサゴユリ(撮影日：平成17年10月6日)

4) アライグマ *Procyon lotor*

① 分布および生態

本種は北米原産のネコ目アライグマ科に属する種で、外見的には顔の黒い帯と尾の縞模様の特徴がある。蹠行性の歩行のために足跡は明瞭に残り、5本指の形状とその大きさから在来哺乳類との区別は容易である。夜行性で、森林や湿地帯、市街地まで多様な環境に生息するが、一般的には水に近い場所を好む。食性は雑食性で動物全般から果実、野菜、穀類まで幅広い。

(参考資料：「外来種ハンドブック」)

② 確認状況

1月の哺乳類調査で、コナラ林に設置した自動撮影装置により成獣と思われる個体を撮影することが出来た。撮影状況から、夜間に単独で活動している個体が撮影されたと考えられる。また、沢沿いでは水中に排泄された糞が確認されている。

③ 留意事項・その他

一般的に、本種の侵入の影響としては、農業被害やアライグマ回虫症といった人間生活への直接的被害のほかに、捕食・競合による在来種への影響が危惧される。特に調査地では里山の哺乳類として代表的なタヌキの生息が確認されており、両者の食性が比較的似通っていることから、食餌やナワバリをめぐる競合する可能性が考えられ、在来のタヌキに及ぼす影響が懸念される。

(参考資料：「外来種ハンドブック」)



写真3.1.11 アライグマ(平成18年1月11日撮影)

5) アオマツムシ *Truljalia hibinonis*

① 分布および生態

本種はバッタ目マツムシ科に属し、体長約30mm、メスは全体が緑色、オスは背中に茶色の斑紋を持つ。中国原産で、国内では1898年(明治31年)に東京赤坂のエノキから初めて確認され、1980年頃からカキやナシの害虫として注目され始めた。樹上生活性で、街路樹などでリーリーとよく通る声で鳴く。成虫は晩夏から秋にかけて見られる。

(参考資料：「外来種ハンドブック」)

② 確認状況

7月の昆虫類任意採集調査において確認された。

③ 留意事項・その他

本種の侵入の影響としては果樹の食害が挙げられるが、防除手段としては果実の袋がけが有効とされている。苗木などに産卵された卵の持ち込みの他、木から木への短距離の飛翔移動、正の走光性による灯火への飛翔移動によって分布を拡大している。

(参考資料：「外来種ハンドブック」)



写真3.1.12 アオマツムシ幼虫(平成17年7月14日採集)

6) アワダチソウグンバイ *Corythucha marmorata*

① 分布および生態

本種はカメムシ目グンバイムシ科に属し、体長約3mm、周縁に小棘を列生し、上翅には褐色のまだら模様を有する。中南米原産で、国内では2000年に兵庫県西宮市のセイタカアワダチソウから初めて確認され、その後爆発的に分布を拡大した。キク科のセイタカアワダチソウを主な寄主植物とするが、個体数が多くなるとキクやヒマワリ等、キク科の園芸植物の他、サツマイモ、ナス等の作物も加害するようになる。春から秋にかけて数回発生し、成虫で越冬する。

(参考資料：「農技情報 No. 121 奈良県農業技術センター 2005年」)

② 確認状況

7月および10月の昆虫類任意採集調査において確認された。

③ 留意事項・その他

本種の侵入の影響としては花卉および農作物への被害が挙げられる。セイタカアワダチソウは今や北海道から沖縄までの広い範囲で蔓延っており、今後もアワダチソウグンバイの分布は拡大するものと予想される。在来のグンバイムシ類の場合は天敵によって発生数がコントロールされているが、アワダチソウグンバイには天敵が存在しないため、このことも激発を招く要因となっている。本種は殺虫剤には比較的弱く、スミオチンやオルトラン等の定期的な散布が最も確実な防除法とされている。

(参考資料：「農技情報 No. 121 奈良県農業技術センター 2005年」)



写真3.1.13 アワダチソウグンバイ(平成17年7月14日採集)

3.2 まとめと提案

高蔵寺一帯では、昭和40年代前半に始まった高蔵寺ニュータウンの建設をきっかけに、平坦地に多く見られた畑地や水田などの農耕地は著しく減少し、丘陵地の一部が住宅地やニュータウンの取り付け道路として利用されるなど、動植物の生息環境は著しい変貌を遂げている。当該調査地が位置する高座山は、まとまった樹林環境を有する一方で、道路の整備や宅地化の影響により、周辺の河川や丘陵地とは連続性を失った生態系が成立しており、動植物の生息・生育環境としては多様性を欠いている。

また、近代社会における交通網の発達や交通機関の高速化、大量輸送が可能になったことにより、日本には諸外国から多種多様な動植物が輸入され、その一部が外来種として国内に定着している。外来種が従来の生態系へ及ぼす影響については、その現状認識を受けて、2004年6月に「特定外来生物による生態系等に係わる被害の防止に関する法律」が制定され、翌年2005年6月に施行されており、社会問題としても無視することは出来ない状況となっている。

今回の調査対象である高蔵林特別緑地保全地区においては、ヒメカンアオイ、ヨタカやサンショウクイ、ギフチョウなど、保護対策が必要と考えられる重要種が確認されている一方で、セイタカアワダチソウやキダチコンギク、アライグマ、アワダチソウゲンバイなどの外来種も確認されており、これらは今後緑地の保全管理方法を検討する際に、配慮が必要な種として位置付けることが出来る。現地の状況を踏まえた上で、必要と考えられる配慮事項等を表3.2.1に整理した。また、配慮が必要とされる箇所について図3.2.1に図示した。これらを、今後の保全管理方法を検討する上での参考資料として提案する。

表3.2.1 注目すべき種の生育・生息環境および保全管理に関する配慮事項

注目すべき種の生育・生息環境	重要種	外来種	保全管理に関する配慮事項
東部のコナラ林	ヒメカンアオイ・サンショウクイ・アオゲラ・ギフチョウ	—	沢沿いの湿潤な立地の保全 コナラ等の大木の保全 常緑低木の除伐
北部の草地	ツマグロキチョウ	セイタカアワダチソウ・キダチコンギク・タカサゴユリ等	定期的な草刈りによる外来種定着の防止
尾根沿いのアカマツ群落	ヨタカ	—	アカマツ林の保全 繁殖阻害の防止

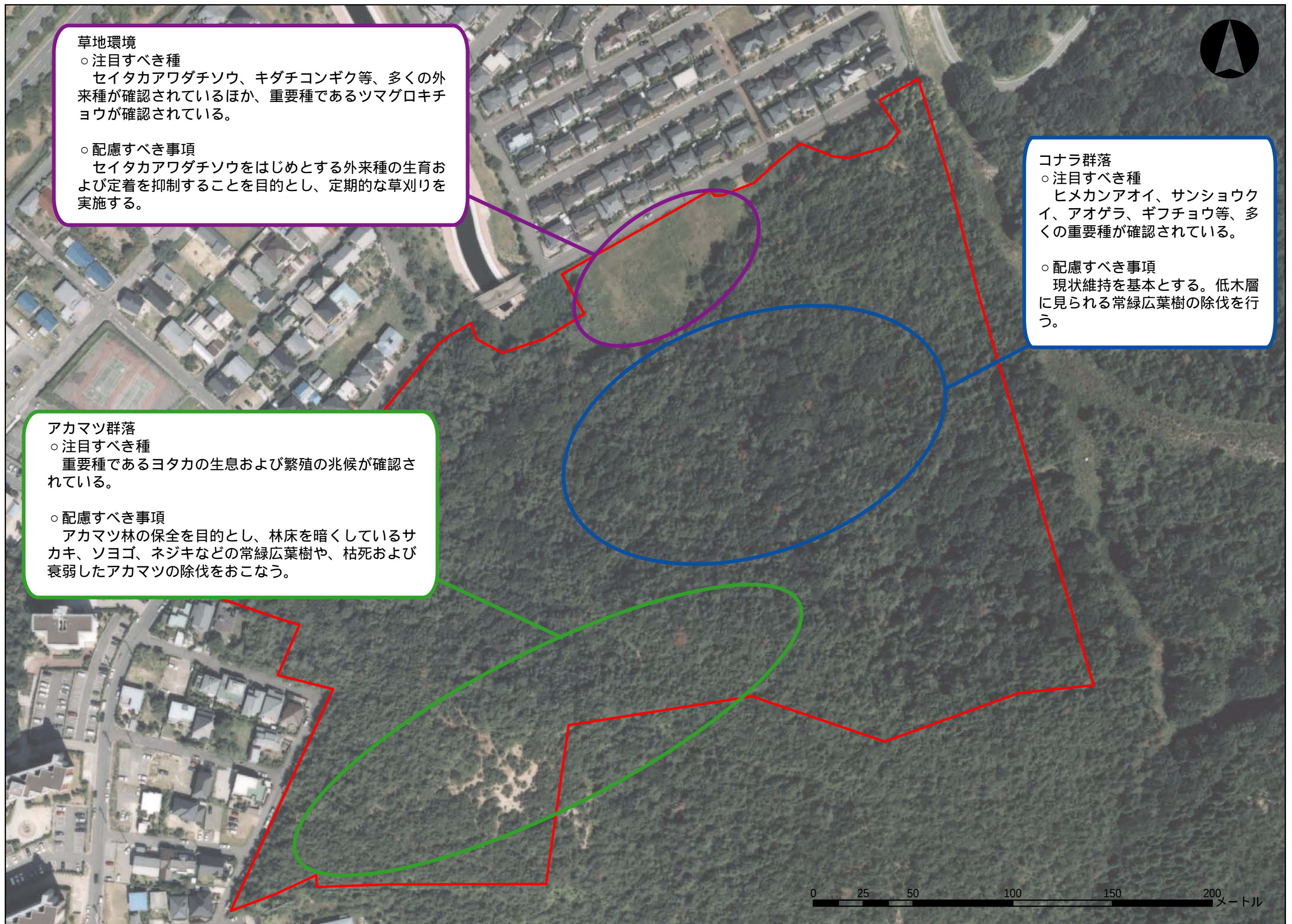


図3.1.2 注目すべき種の生育・生息環境および配慮すべき事項